

## 世界保健機関 (WHO) 2006年報告書のまとめ



- ① ストレス関連症状
- ② 発生中の放射線の影響についての不安  
(胎児影響)
- ③ 脳機能への放射線の影響  
(汚染除去作業員への影響)
- ④ 汚染除去作業員の高い自殺率

出典：World Health Organization: Mental, psychological and central nervous system effects. Health effects of the UN Chernobyl accident and special health care programmes: report of the UN Chernobyl forum expert group "Health"(eds. Bennett B., et al), WHO, Geneva 2006.

原子力災害で、ストレスによりどのような精神医学的影響がみられたのか、世界保健機関 (WHO) 報告書のまとめでは4つに要約しています。

1つ目はストレス関連症状です。ある研究者の報告によると、被ばく者集団では、説明できない身体症状や自己評価による健康不良を申告する割合が対象集団の3～4倍に上ります。

2つ目は、事故発生時に妊娠中であった母親たちが、生まれてきた子どもの脳機能への影響を非常に気にしていることがわかっています。例えば母親たちに「自分の子どもは記憶力に問題を抱えていると思うか」といったアンケートでは、そう思うと答えた母親は、非汚染地区(7%)に比べ、強制避難地区(31%)では4倍になりました。

3つ目と4つ目はそれぞれ、汚染除去作業員に見られた脳機能への影響と高い自殺率です。

ある研究グループからは、最も高い線量に被ばくした汚染除去作業員は認識障害、脳波検査(EEG)の変化、統合失調症、痴呆、器官脳機能障害の徴候、および磁気共鳴映像法(MRI)による映像の変化などがあったという報告があります。また汚染除去作業に参加したエストニア人4,742人について追跡調査を行ったところ、1993年までに、がんの発生率と死亡率の増加は認められませんでした。144人の死亡が確認され、その19.4%が自殺であることがわかりました。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2014年3月31日

：2015年3月31日